MFUマイスター《技術遺産》認証

一般社団法人日本メンズファッション協会が実施する「MFUマイスター《技術遺産》認証」では、MFU会員社の周辺を中心に、次の時代に伝承すべき高度な技術、知識、見識をお持ちの技術者あるいは技術チーム、すなわち「かくれた名人」「知られざる革新技術」を発掘し、これを広く世の中に伝えていくとともに、技術そのものの積極的な発展と継承を促すことを企図しています。

また一方で、これら製品を扱う企業において、日々の販売促進やPR活動を通じ、名人たちの高度な技術に裏づけられた製品であることをアピールし、低迷する市場の活性化を図っていただくことを目的としています。

【応募資格】

- 当該分野において、卓越した技術と経験を有し、これを後世に広く伝承していく強い意思と能力をお持ちの方で、20年以上の経験を有する方。
- 上記を客観的に証明可能な履歴を有している方。
- マイスターの称号にふさわしい人格と認められる方。

※基本的に技能者の方が応募資格を有しますが、モノづくりの特性上「チーム」「セクション」単位での応募も可としています。

【審査方法】

1次審査（書類、資料、実績審査）、2次審査（1次審査通過後、工場・工房・研究機関等の実地調査）をもとに、マイスター選考委員会（グッドエイジング委員会）にて最終の選出を行います。

これまでの認証者

2011年

【団体・チーム部門】
天草フレックス株式会社（シャツ）
株式会社エミネントスラックス（スラックス）
株式会社ダーバン宮崎ソーイング（紳士服製造）
玉野縫製株式会社（紳士コート）

2012年

【個人部門】
飯田 新一（ネクタイ）
石川 進（革小物）
岡部 英一（シャツ縫製）
坂井 栄治（靴）
田中 格郎（スーツ縫製）
千葉 孝順（若柳地織）
深代 勉（パイプ）
【団体・チーム部門】
株式会社アズール（ニット生産チーム）

2013年

【個人部門】
石本 英光（シューズ 仕上げ職人）
黄金井 弘行（ダイヤモンドカット・研磨・デザイン）
田中 康信（織物職人）
原 俊行（品質検査）

2014年

【個人部門】
眞弓 隆治（スラックス）
前田 周二（スラックス）
矢島 久和（シャツ）
山口 道子（シャツ）

2015年

【個人部門】
トニー タナカ（メイクアップアーティスト）
川上 和男（縫製工場運営スペシャリスト）
【団体・チーム部門】
株式会社レナウンインクスいわき事業所
（生産管理チーム）

2016年

【個人部門】
石渡 孝（手縫い靴スペシャリスト）
小川 登（カッティングデザイナー（裁断士））
佐藤 正樹（糸作家・デザイナー）

2017年

【個人部門】
近藤 健一（オーガニックコットンの普及・伝道師）
藤田 光弘（刺繍・プリントの総合プロデューサー）

2018年

【個人部門】
佐々木 薫（アロマテラピーの第一人者）
寺田 元（タオルソムリエ）
土方 直樹（スーツづくりのスペシャリスト）

2019年

【個人部門】
渡邉 文雄（特殊糸の創造者）
横山 宗生（タキシードデザイナー）

2020年

【個人部門】
奥田 敏光（メンズスラックスの先導者）
【団体・チーム部門】
中央帽子株式会社（技術研究パタンナーチーム）

2021年

【個人部門】
菊池 朝美（パイプ職人）
吉野 明男（株式会社フェールムラカミ　会長兼社長）

2022年

【個人部門】
荒川 徹（株式会社京都紋付 代表取締役社長）
【団体・チーム部門】
株式会社宮崎ファクトリー（スーツ）

やがて迎える創業200年に向けて。

佐野 統康（もとやす） 氏

丸正ニットファクトリー株式会社 代表取締役社長

ニットを愛するがゆえ、自分たちで作り、自分たちで売っていく。

ペリーもまだ来航していないころ。江戸幕府にほころびが生じていたとしても、この国がいまだ太平の世を過ごしていた天保3年（1832）、初代佐野庄右衛門によって新潟の見附で創業した。

江戸から遠く離れた新潟は豪雪地であり、織物業はいわば副業として始まった。

事業を大きく発展させたのが明治元年（1868）に二代目を継いだ佐野庄吉で、相当な努力家だった。近くの棚織神社には彼の功績を讃える「佐野君遺徳碑」が建立され、日本近代資本主義の父とされる、かの澁澤栄一翁が自ら筆を執っている。のちに織物と撚糸からニットへ業態を広げて、現在の基盤を築いた。

七代目となる統康氏は青山学院大学に進み、高校から続けていたアマレスリングに没頭した。バブル真っただ中の飽食の時代に、わざわざ減量する苦しみを選んだ。浮かれることもなく忍耐強く4年間の大学競技生活をまっとうした。

すでに銀行や証券会社から内定をもらっていたが、将来家業を継ぐことも考慮した六代目父吉和氏は商社を薦めた。ただ大手はほぼ採用を終えており、ぎりぎり間に合ったのがイトマンだった。繊維事業本部に配属され、国内外ニット生地や製品を営業していた。ところが、いわゆるイトマン事件が起こり、ここで新たに財務も学んだ。4年後に事業本部ごと住金物産に合併されたが、家業にもどるまでの計7年間で、徹底して現場を知り、産地からアパレルや小売業に至る商流全体を学ぶことができた。

一方で父は、織物は最終商品ではなく付加価値を持ちづらく、1994年にニット専業の現社名に変更した。

1996年4月、統康氏は新潟にもどる。そこからさらに4年後に七代目として父の後を継いだ統康氏は、よりマーケットに近づこうと考え、東京原宿に営業・企画部門を構え、消費者の嗜好を肌で感じようとした。

同社には、大きな強みがある。一つは、和歌山県の島精機製作所が誇る自動編機を140台所有し、3Dニットと言われる一着をまるごと編み上げる立体無縫製編機ホールガーメントが50台以上含まれている。国内ニット製品の生産能力としてはトップクラスにある。

さらに強みとなっているのが、アートディレクター以下総勢10名の専属エンジニアおよびデザイナーの連携で、企画力と複雑なオペレーションを自在にこなす技術が、難易度の高い3Dニットの完成度を圧倒的に引き上げている。

数年前に、原料やテキスタイルで有名な国際展示会イタリア・フィレンツェのピッティフィラッティやフランス・パリのプルミエールヴィジョンなどに何度か出展した。世界の最前線に身を置くことで、さまざまな情報や現地の評価基準などを学んできた。こんどは製品そのものが問われるファクトリーブランドニットの展示会に出ていく番だ。

先人たちは苦境が訪れるたび、恐れず改革を推し進めてきた。歩みを止めるわけにはいかない。準備はできている。

創業200年に向けて、「伝統と革新」を推進力に、どこにもない景色を見つけに行く。

文＝瀧　春樹

2023年 認証者インタビュー

「靴磨き世界一」の称号をたずさえて。

長谷川 裕也 氏

株式会社BOOT BLACK JAPAN 代表取締役

日本の足もとに革命をと、出資金500円で始めた靴磨きは、奥が深かった。

こうと思ったら、もう駆け出している人なのだろう。昔から野望のようなものが強くあって、小学生のころにはいつか社長になろうと思っていた。

早く働きたかったから、地元の商業高校を選び、いくつか転職した。働きすぎて体を壊し、親から辞めてくれと懇願されたこともあった。職を失って無一文になり、日雇いで食いつないでいたときに思いついたのが、靴磨きだった。

道行く人の足もとをピカピカにしたいと意気込んだものの、そのじつ磨き方すら知らなかった。100円ショップに向かい、まずは自分とお客さんが座る風呂用の椅子を2つ、ブラシとワックスが入った靴磨きセットと布とを買い求め、計500円の出資でいきなり路上に出た。なんと、初日で7000円を売り上げ、なんていい商売なのだろう、と思った。2004年、20歳のときだった。

路上でも、服装には気を使っていた。冬は革ジャン、夏は麻のシャツにパナマハットといった出で立ちである。ところがある日、お客さんに「かっこう悪いね。下手だね」と切り捨てられた。

靴磨きにうまい下手があるなんて思いもしなかった。それからは周囲にいる先輩たちの仕事を見てまわり、磨き方や道具などをつぶさに観察した。自ら客となり、有名ホテルの靴磨き職人さんなどに片っ端から磨いてもらって技を盗んだ。気がつけば東京中を駆け巡っていた。

一方で、皮革そのものの特性を学ぼうと東京都主催の長期の研修にも参加した。ひび割れとかシワの直し方など、得たものはそのつど家に持ち帰って試してみる。そのうちに自分が磨いた靴が、どんどんピッカピカになっていった。

2008年、24歳のとき、東京・南青山に店を構えた。ブラックスーツを着て立ったままカウンター越しに靴を磨く、世界で初めてのシューラウンジ「ブリフト アッシュ」である。もともと夢のある仕事をしたかったから、英国、イタリアと、2年ごとに社員全員で渡欧し、現地で靴を磨く実験の旅にも出た。

日本人の靴磨きの技術レベルは高い。2017年に靴磨きの世界大会であるワールド・チャンピオンシップ・イン・シューシャイニングの決勝大会がロンドンで開催された。相手は英国人とスウェーデン人だった。磨き終えると2人は長谷川さんに向かい、発表の前に「あなたがチャンピオンだ」と讃えた。光沢とぼかし、全体のバランス、どこをとっても圧倒的な初代チャンピオンが誕生した。その3年後には、NHKの「仕事の流儀」で長谷川さんの仕事ぶりが注目された。

いま、世の中はどんどんカジュアル化している。スーツを着る人が少なくなって革靴を履く機会も少なくなってきた。30年後、50年後はどうなっているのだろう。かつての着物や草履のように、このまま退場してしまうのだろうか。

ただ着物は、日常生活からは消えても、さまざまな文化や日本人の精神性と深く結びついてずっと生きている。足もとのたたずまいも、一つの文化や産業として、昇華しながら受け継がれていくことを誰よりも願っている。

文＝瀧　春樹